

---

# 勝者

触媒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勝者

### 【コード】

N0068H

### 【作者名】

触媒

### 【あらすじ】

都会に暮らす一人の冷徹で行動力のないつまらない男性の日常的で平凡でつまらない生活とその心の動きを描く

## 1 日目

「1 日目」

「もう死ぬしかなくね？」

決して文として書きたくないようなセリフを彼は言う。

駅の改札口を出た辺りである若そうな男女の会話が聞こえる。

何の話をしている最中にそんな言葉が出てくるのか知らないが、

若者特有の冗談か何かだろうか。

俺は聞いていないようなフリをしながら何気なくその場を通過した。それが普通の人間というものだ。

いちいちそんな会話を気に留める為にはこの街に住む人間はあまりにも多すぎる。

駅を出ると太陽が照っている。

太陽の下ではどんなものもそれなりに綺麗に見えるものだ。

他愛もない日常が続いている。

僕は特にとりえもなく、友達も少ない地味な人物として生きている。今の俺には一生懸命人とケンカする元気ですら羨ましい。

僕はきつと誰からもたいして理解されることなく死ぬ人間だろうと自分では思っている。

そんなに力を込めて生きる気力が湧いてこない。

今の地球の人口は60億くらいだっただろうか。

その中で世界中の人間に知られるくらい目立つ奴ってというのはどのくらいで、

逆にどのくらいの人間が大部分の人間に存在を知られることがないまま息絶えていくのだろうか？

今俺の周りにいる人間の感情を考えているだけで恐ろしいほどの歪みに気が遠くなるのに今まで何人の人間が自分の心を燃やし尽くしては死んでいったのだろうか？

そしてその生きたことは無駄に終わったのではないだろうか？  
それとも何か意味があったとでも？

ぼんやりとくだらないことを考えながら駅から会社へ歩く俺の敵は、眩しい眩しい、俺には眩しすぎる太陽様の日差しなんかではない。この退屈な日常だけが唯一無二の敵なのさ。

俺はそんなことを考えながら、一人でニヤツと笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0068h/>

---

勝者

2010年10月10日04時54分発行